



「医学部教授に就任して」

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・感染免疫学講座・感染分子解析学分野 教授 西田 教行 (5期生)

本年7月、長崎大学の感染分子解析学分野（旧細菌学教室）教授職を拝命しました、4期入学5期卒業の西田教行です。琉球大学医学部医学科同窓会の皆様にご挨拶申し上げます。私は昭和40年福岡県柳川市生まれ、県立伝習館高校卒業後、昭和59年4月から平成3年3月までの7年間、琉球大学で学び、卒後は長崎大学附属病院第二内科にて研修を受け、その後、縁があって細菌学教室に大学院生として入り、ウイルスとプリオンの世界に導かれて、今日に至っています。恩師、片峰茂先生（現長崎大学学長）のご退官のあと、プリオン研究を引き継ぐものとして現職にあります。

沖縄を離れて18年の歳月がながれ、その間、多くの後輩たちが育ち、同窓会も大きくなっていることを思うと、いつまでも学生気分のまま、いい加減な生き方ではいけない立場になったのかな、とあらためて考えたりします。しかし元来いい加減な人間で、責任ある医療の世界で医者として生きるには不適切な人間だ、とても生きていけないと自覚したところから、自分の研究者としての人生が始まったように思います。学生時代のことを書くと「不適切な人間」であることが世間に露呈しますので省きますが、学業半ばにて休学を断行しシベリア鉄道にてソ連からヨーロッパへ約半年バックパック旅行し、帰国後、旅先で出会ったイギリス人女性と学生結婚した、あの4期生のニシダといえ、思い出して下さる恩師、先輩、後輩がたも多くおられるでしょう。あのニシダがいつのまにか基礎のプリオン研究者になって、あろうことか長崎大学の教授に就任して、いまでは学生たちの前に立ってウイルス学を講義し、出席をとり、試験をしています。

「学生の前に立つ」時はいつも緊張します。学会よりも講演会よりも研究費申請の審査会よりもです。

一昨年は卒後初めて母校に特別講義に何う機会がありました。ウイルス学の森直樹教授が“ようこそ先輩”の一環として呼んでくださったものです。そのときも非常に緊張しました。それはとりもなおさず、私の自信のなさからくるものですが、感覚的にいうと、学生の前で身ぐるみはがれて、素っ裸にされて、おまえはだれだ、と問われているように感じるので、そして学生だった自分自身がいまもそこに座っていて、じっとこちらを見ているように感じます。ですからこちらも必死です。「なにがなんだかわからない学問世界で、もがき苦しむことが如何におもしろいか」を伝えたいと必死です。でも、そんな話は結局どうでもいいことのように、その場を流れていってしまうので、学問的な話よりも自分が学生時代をどう過ごしたかに話の中心を持って行きます。そして、自分で考え行動し自分なりの生き方を見つける（すくなくとも見つけた気になる）ことが、時間の豊富な学生時代になすべきことの第一だと、わかりきったことを言ったりしています。とにかく、学生に真摯に立ち向かうことが教授のもっとも大事な職責ではないかと思っているこの頃です。

4期入学の私たちは、先輩たちほど国試重圧を感じる必要もなく、非常に個性的なメンバーが多かったこともあって自由な雰囲気がありました。それを一番享受したのがわたしだろうと思います。やり過ぎていろんな人に迷惑をかけました。非常にフラジャイルな時期、沖縄で温かく育ててもらって一人前の人間にしてもらいました。感謝の言葉を贈るべき人がたくさんいます。この場を借りて、ただただ、ありがとうございました、お世話になりましたと伝えたいと思います。母校への恩返し、沖縄への恩返しをこれからどういう形で行えるか、考えていきたいと思っています。